

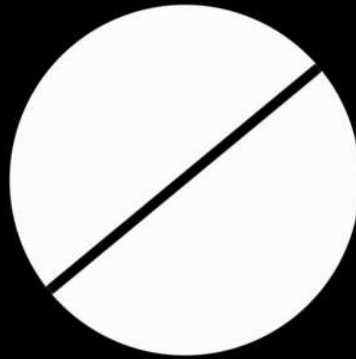


Sanderer S Sunder



Mature Content

いつも忘れないでね わたしたちには
決して本当の意味が分かることはないって
—— SADE, *Nothing Can Come Between Us*



05. Scout type

06. Sweetest Stranger

07. Sign of Solitude

09. Swirl of Sorrow

10. Sauria Spindle

11. Shrieking Strider

13. Sore Spreader

14. Souvenir Sinkers

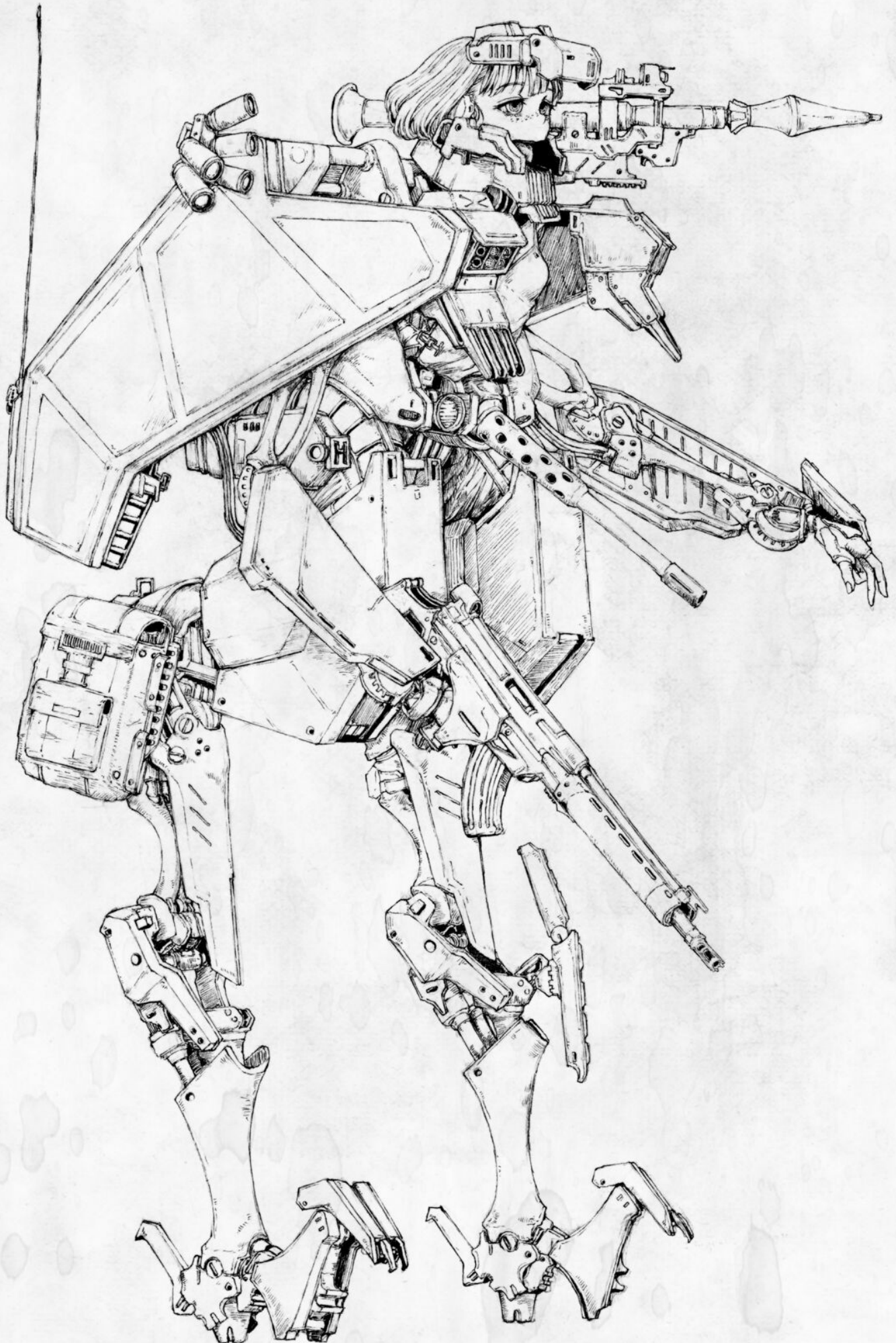
16. Appendix

第一次アルテンアキタ紛争に至る経緯としてまず外せないのは、アルテンアキタが
バース連邦内でもとりわけ存在感と経済力を失っている地域だったということでしょう。
そのうえ連邦北西部で海に面していて、駐留軍もごく小規模でした。ようやく四眼朝の
支配が安定してきたフォルミスにとっては連邦に揺さぶりをかける格好の取っ掛けりで、
アルテンアキタにしてみれば「やむをえない」けれども「おいしい話」。もちろんすべてが
目論見通りに進んでいたとして、アルテンアキタにとって良い結果が待っていたかといえば、
だいぶ疑わしいところです。

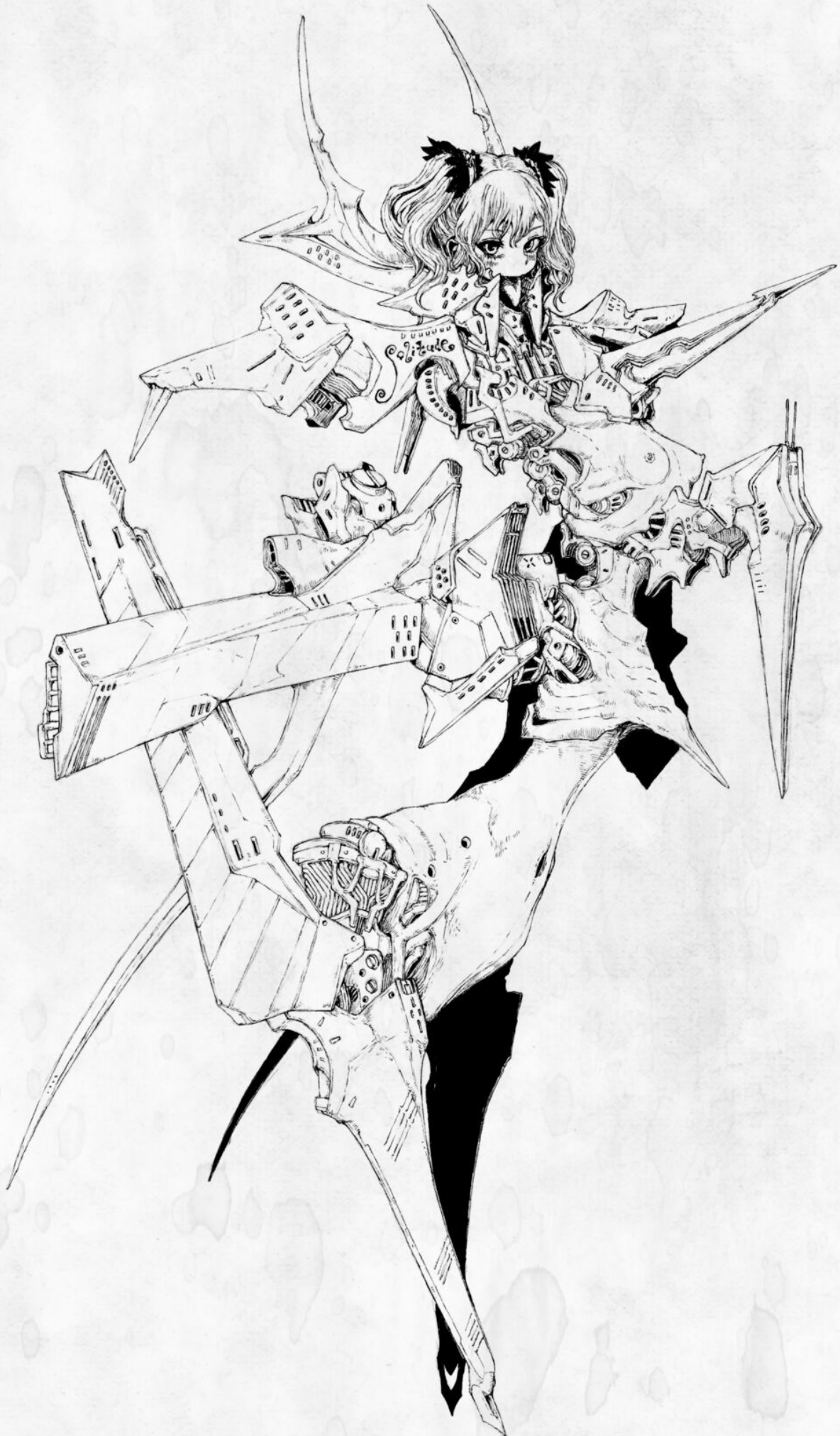
——バース連邦のジャーナリスト、ハンナ・ブラックウェル

13 歳でした。ネクロッタの大会に参加するために公民館へ自転車を飛ばしてたんです。
夜更かしでいじったヘッドバッグを背負って郊外の丘、市街の中心区が見渡せる道の上です。
ええ、ただの子供でしたから、そのころニュースを騒がせていた連邦離脱がどうか、
フォルミスの大使がどうか、耳には入っていましたが何も理解していませんでした。
それを差し引いても、戦いの気配というやつは全くなかったと思います。
そう、それで丘の上の道です。何の気なしに父が働く公務庁舎のビルを……第二次紛争で
崩落したやつです。その辺りを眺めたら、空から煙の筋を引く何かが十以上ビルに向けて
降りて来るのが見えました。連邦特殊部隊の弾道降下、あなたもご存じのバース初の
正規軍ネクロテックを編成した一群です。

——アルテンアキタ州公務官、ヘンリーク・ネズヴァル







例の“ヒールウォーカー”を見てフォルミスの連中は相当焦ってた。第三飛び地にはいまだに骸閥は勢力を伸ばせてないだろう？あっちではネクロテックは禁令だから。で、私やウォーフェルド、ニズロエス達で大使経由で外征隊に営業した次第さ。「国外で敵ネクロテックに対抗するための機体を手早く用意できる契約」という体で、実際には骸閥が傘下に加えたメルヴォワン&コールマン社のネクロキットの実戦データを収集するのに好都合な環境を、我々の持ち出しなしで提供させるという計画だった。M&C社がこれだけ成長したから、今では先見の明ある取引だったと言えるんだが、俺は正直実用性を疑ってた。共和国流の仕事をずっと見てきて、一体一体取り組むモノとってきたからね。

——元“骸閥”のフィクサー、ペレズ・カントル（服役中）

戒厳令が敷かれて、外出もままならないようになりました。1週間もしないうちに学校が休みであることの喜びを、退屈と漠然とした不安が上回るようになりました。郊外は戦闘区域にならないよう両勢力が取り計らっていたとはいえ、遙か遠くからの銃声、砲火の音は聞こえますし、ある時期からはまたまったく新しい……電磁的な音？ですかね、それも加わりました。あれは“サングラズ”が出してたんでしょう？そうそう、離脱派ゲリラの下っ端と、パーズの進駐軍の巡視部隊が競うようにして郊外の住宅地の一角に支援物資を積み上げていたのを覚えています。二階の窓から見える場所だったんです。どちらも相手方の物資があると撤去して、自分たちの分だけ残していこうとするんです。いちごっこが続いた挙句、何らかの取り決めができて交互に置きに来るようになりました。まあ、私たち住民にとっては飢えなければ何でも良かったのですが、梱包にプロパガンダ、中敷きの紙にも煽り文句で……そして、その頃には私も薄々感づき始めたんです。あの日から一度も父は帰ってきていませんでした。

——アルテンアキタ州公務官、ヘンリーク・ネズヴァル







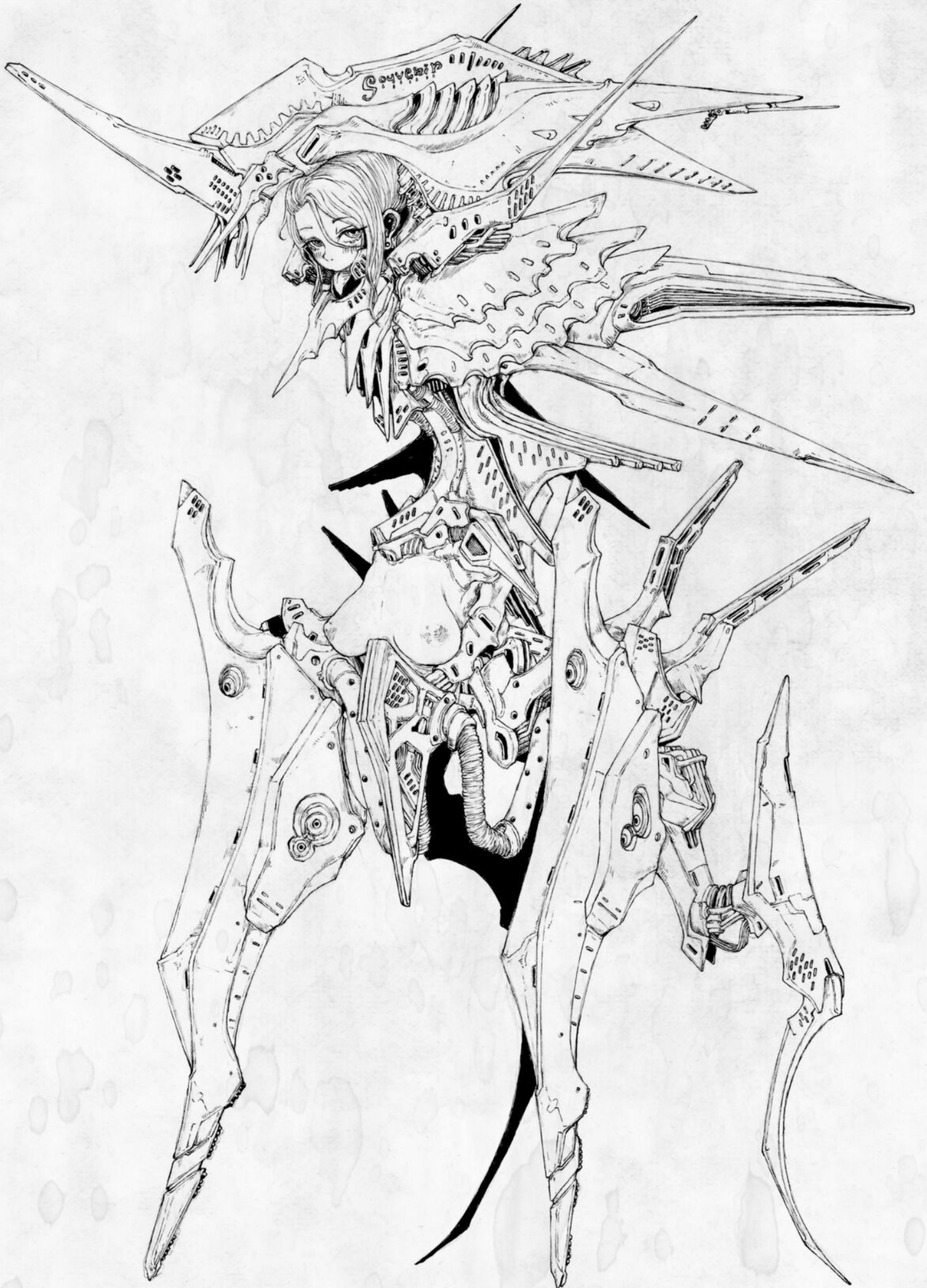
「大使が独断で突っ走った」というのが説明のすべてですね。バーズの先遣隊が先走って弾道降下なんかしたのも、彼が情報を大げさに盛ったうえでリークしたのが最大の原因です。我々が本気だったなら外征隊にウォーキマイラの一体もないなどありえないことです。開戦から少し経った頃には連保側でも何かがおかしいと気づき始めたんでしょうね、表向きは閉鎖していた大使館から会談の打診が来ました。話し合いの結果、紛争のかなりの部分が嘘であることが分かった後で、それでも残った本物はこの三つ、「大使の保身」「骸閥の欲」「離脱派の熱意」「発生する負債」ああ四つですね。とにかく、ようやく情報共有がなされて事態を収拾する段取りが始まったのです。これで大使の名前が残されていない理由も想像がついたでしょう。蛟龍のハンスレ家の分流だとかなんとか言って増長していましたけどね、まったく勘違いも甚だしい、彼の名は今やどこにも、誰の記憶の中にも存在しません。

——四眼朝フォルミスの外交特使、“赤龍” ケデレムレフ・クルグス

私も母も、隣近所のみならずテレビとラジオで暇を潰すしかありませんでした。紛争も三週間目に入り、疲労と慣れからくる倦怠感が私たちを支配していました。駐留軍は離脱派ゲリラの小基地をなかなか落とせず、かといって離脱派も戦力不足で先に抑えられた重要拠点を奪えない停滞した戦局。フォルミス本土は約束の援軍を一向に寄越さない。骸閥が間に入ってインフラの不可侵を守らせていましたが、それだって今にして思えば紛争を少しでも長引かせたかっただけだったんでしょう。母は……かなり早い段階で気付いてたんだと思いますが、なんの報せもなければ、問い合わせもできないままいつもと違う生活を強いられて、でも家の中は平和で。どうしたら良いかももう分からなかったんでしょう。私だってそうです。ラジオから流れる離脱派のプロパガンダ放送で、とうとう父の名前を耳にすることになりました。この居間、私と母のふたりで一緒にです。

——アルテンアキタ州公務官、ヘンリーク・ネズヴァル





州軍の大半は離脱派に参加しましたが、既に発生している事態に迎合して仕方なく、という部隊が大半でした。私の上官も外ではともかく、兵舎内では離脱への懷疑を隠そうともしませんでした。戦局はちっとも動かず皆がうんざりし始めていたところに、駐留軍からの内応の誘いです。各拠点で一斉に持ち場を放棄する、すでに何ヶ所も申し出に応じているという話でした。それで紛争が終わるなら何でもいいというのが正直なところだったんでしょう。あとはご存じの通り。

その後でさらに不毛な第二次紛争もあって、それを機に除隊して実家に帰ったんです。

本当に馬鹿げた紛争で……でもサンダラー SAS アンダー、あれのおかげで工場が

建ちましたね。もちろん SAS は「解放アキタニア特殊部隊」ではなくて

Seceding Aquitania Special force
Special Assembly Section

「特殊組立部門」に直す必要はあったんですけど。いところが技師で働いてるんです。

あんまり人死にが出なかったからこんな調子で話せますけどね。

——元アルテンアキタ州軍士官、ムーリス・カルスキ

劇的に事態は変わりましたが、実際に起きていたことは劇的には程遠いものです。

学校は再開し、母には公的な書類が届きました。父の死は悲劇ではなく、痛ましくはあれどただの不運になりました。父の遺体は庁舎ビルの中庭に埋められていたので、改めて場所を移して正規の埋葬と葬儀がありました。しばらく何もかも、当事者という気がしませんでした。

万が一もしアルテンアキタがフォルミスの外地になっていたら、父の銅像ぐらいは建っていたかもしれません。ほんの短い間でしたが、離脱派がラジオで語った大仰なあれこれは……当時だって母も私も醒めて聞いていましたが、それが“事実”になっていたなら、そのうち私も信じていたんでしょう。不思議な感覚です。

結局父の死は大した意味を持てませんでした。でもそれで良かった。

時々不意にどうしようもなく悲しくなる、ただの家族の死であってくれますから。

——アルテンアキタ州公務官、ヘンリーク・ネズヴァル

※過去のネクロテック本で言及のあった各勢力について簡単な説明を付す

■景の塔■

“混沌渦”によって無数のマルチバースに分裂した地球圏を再統合するべく設立された組織であり、その名は拠点とする異次元から嵌入了した生体組織の軌道エレベーターに由来する。生物学的な種族としてもバラバラになったヒトを認証するレース・コンを主宰し、また塔の周囲を囲う重層都市タラールを統治する。飛び地（混沌の収束により安定して残った、大陸サイズの多次元）の文明をよく言えば手助け、悪く言えば思い通りに管理するために常に暗躍し、新興の勢力や技術に干渉するための下位組織ナンセンス・アリス・クラブを持つ。

■共和国■

飛び地Cの南大陸北部に位置する新興国。禁忌を犯し新カジエラ公国を追放された機械技師達が南下し、“大沼”の魔女やネクロマンサーの魔術を吸収して生み出した体系「ネクロテック」を基盤にして作り上げた技術官僚国家。国の成長に伴って隣に位置するグヴェレ王国を併合しようと“砂時計戦争”を起こし、一時は首都まで攻め込むも、性急な拡張とネクロテックの発展が景の塔の介入を招き戦局が逆転、最終的には国家解体に至った。領土はグヴェレと新カジエラに分割された。また、ネクロテックも大幅に制限されてアーカイヴされる予定だったが、想定外の拡散が起き全地球圏に普及することとなった。

■マスター・ネクロテック■

共和国のネクロテック技術者の頂点に位置する13人からなる評議会のメンバー。共和国が技術官僚国家である故に大きな権限を持つが、様々な党派の代表が集うため常に様々な思惑が拮抗する場でもあった。最終期のメンバーにはデラモルテ、クラリモンド、クロンダイクといったのちに名を残す錚々たる面々が名を並べていた一方、政治的な都合でまったく知識の分野の人物も複数在籍しており、戦時体制に多くの混乱を招いた。最終メンバーは以下の通り：

1. イシュトバーン・ルカーチ（最初期からのネクロテック・エンジニアの重鎮）
2. ベルナルド・ロンカ（新カジエラの著名な貴族出身であり、外交官を兼任）
3. ユーゼフ・オヴ・V（代々優秀なエンジニアを輩出する名門出身）
4. エルズ・シャフル（ネクロテックの制御系の基礎を完成させた技術者）
5. ガンドリュー・ペーベル（重ネクロテックに定評のある古参者）
6. アンフル・クワン・バルビエ（守旧派の最有力技術者）
7. メーガン・トッドリーナス（国内重産業を統括する野心溢れる女性官僚）
8. レーモン・ティヤール・スターラン（評議会の監視のために編入された政治委員）
9. ニクス・ノート・ナスティング（技術的な実績でこの地位に上り詰めたが来歴不明）
10. ミッコ・アカライネン（ネクロテックの量産体制構築に大きな功績を持つ）
11. クラリモンド・バーナバス（若くしてマスターに抜擢された優秀なエンジニア）
12. ミカル・アヴィ・クロンダイク（ネクロゲン供給を一手に担う一族の次期当首、女性）
13. カッシュス・デラモルテ（クラリモンドの同期にして後の「最後のマスター」）

■新カジエラ公国■

グヴェレの王家の分家が開拓地に転封されたことを起源とする小国。飛び地Cの南北大陸のちょうど中間に位置し、様々な文化が入り混じるが歴史を通じて常に安定を守っている。バース連邦と境界を接しておりかなり前に議会制民主主義に移行しているが、名目上の君主としてカジエラ公家を戴き続けている。周辺国では常に争いが絶えないため、規模の割に緩衝地帯として大きな役割を果たしており、景の塔から裏表問わず強力な支援を受けていると噂される。共和国の古い名家のほとんどがこの国に由来し、国家解体後は多くが“帰郷”したために、民生用ネクロテックの普及もかなり早かった。また、著名な文人である“貪食者”オールドーが晩年を過ごした、常に夕空で風景が固定される空間異常内に聳える塔都市群もこの国にある。

■グヴェレ王国■

南部大陸でも特に古い歴史を持つ魔導国家であり、雅称として“黒曜の国”がある。南部大陸で信仰される九母神のうち“獣の母”マルグを頂点にした万神殿を持ち、戦となれば地の底より数多の魔獣を呼び、また甲冑の騎士も鬼人めいた異形に変わる。常に女王が統治し、こちらも原則女性であるマルグの至高司祭は第二の最大権力者である。共和国との戦争でよく知られるが、その長い歴史の中ではもっぱら同大陸の“炎の魔女の国”シェザそして“霧の国”チェアムとの三つ巴の戦争を継続してきた。そのために三国合わせて多くの騎士と魔法の物語を擁する。これらの物語はそれ自体で強大な神祕の力を持っており、科学力では他の世界に大幅に後れを取るものの、景の塔に対して存在感を持ち続けている。また、羅刹の高祖が生まれたのはマルグの信徒たちの中からであったと伝えられている。

■クロンダイク散閥■

共和国解体に先立って、所有の財産と技術者九ごとバース連邦に亡命したミカル・アヴィ・クロンダイクが、自ら構築した人脈をもとに立ち上げた、ネクロテック関連の物資の合法・非合法を問わない流通を担う国際シンジケート。組織の下地となった多くの部分がバースで当時衰退の一途にあった旧マフィアの諸家だったため、多くの習わしをそこから引き継いでいる。独自の戦力を有し地球外にまでその勢力を広げているが、商売のためにネクロテックを用いた戦争を煽っているとの誹りを受けることも多い。成立初期には、共和国解体後のデラモルテとクラリモンドの争いに巻き込まれ、初代総帥が暗殺される憂き目に遭っている。そのためLMFとの関係はあまり良くない一方で、V家とは協力関係を保っている。

■駆体ライブラリー派■

共和国解体直後の混乱の中で、屍者ベースのデータバンクを丸ごとネクロテックの大軍に作り変え、環月や火星まで逃亡した一団。ナンセンス・アリス・クラブの追手と戦いながら散り散りになっていったため、大量の分派がある。共和国由来のテクノロジーの保護・継承・発展だけが目的のため、それさえ達成できるのであれば現地の諸勢力との融和に積極的であり、世代交代を経るにつれほとんど同化していることが多い。現状共和国期のネクロテックのオリジナルデータを最も多く所有しているため、彼らを狙う者も多い。

■V家■

共和国末期、戦災による己が家の断絶に直面したユーゼフ・オブ・Vが、才能ある若いネクロテック・エンジニアに自身の名を襲名したのを始まりとする。Vを継いだ者とその弟子から構成される一団であり、実際には家ではなく流派に近い。歴代のユーゼフあるいはユーゼフィーナは原則一人だが、双子で襲名したために二人体制だった時期がある。各代ごとに国を移動しており、散閥以外の勢力とはつかず離れずの距離を保っている。

■ラシ・メザマレク財団■

バース連邦内の多くの企業を糾合し、あらゆる事業を担うコングロマリット。そのトップは「ヒトの夢の領域」からやってきたと自称する異形の人物、魔女ラシ・アン・ミルメウとヒューオン・メザマレク総帥であり、財団の経済活動そのものが世界維持の大魔術式を構築していると主張している。共和国末期に亡命してきたクラリモンドを受け入れてネクロテック部門を開設しており、地球外でのネクロテック運用の先駆者となったが、その後は相次ぐ人材流出で成果を出せない状況が続いている。

■環月連合■

月の周辺に位置するスペースハビタット群の自治体同士による連合。緩い連帯をもっぱらとしており、表向きは強制力をほとんど持たない。環月はハビタットごとにまったく異なる特色を持つことでよく知られる。

■真円軌道臣民国■

景の塔、軌道エレベーターの先端に係留された現状大陸を領土とする国家。航宙艦隊を持ち地球外に絶大な軍事力を持つ。

■バース連邦■

飛び地Cの北部大陸のほとんどを占める連邦国家。大きさに比例した強大な国力を持ち、景の塔からも世界の秩序への貢献を期待されているが、強引に拡大した歴史のせいで小規模な内紛が絶えない。中心となったベルゼサン国はかつては魔導国家であったが、ある事件をきっかけに完全に魔術を捨て去ったという珍しい特色を持つ。

■ネルガル連盟■

ゾスの重力芯打ち込み後、テラフォーミングを主導した真円に火星の植民地は長らく支配されていたが、搾取が横行する状況に不満を持つ者は多かった。地球圏の様々な勢力の逃亡者がどんどん流入するにつれ、植民地も様々な主義に基づくマイクロ国家を次々形成し、ついには一大連盟を締結して真円に反旗を翻した、これが“トネリコ戦争”である。楔のシンボルの下でネルガル連盟は独立を勝ち取ったが、あいにくその後に待っていたのは連盟国家同士の終わりのなき小競り合い、主導権争いの内輪揉めであった。



忘れてはならないのは、ここに物語る事柄は大部分が、死んだ季節の周辺に保証もなしに生起するあの夏の錯乱、あの真夏の半現実、あれらの無責任な些事のせいにあることができるということである。

——ブルーノ・シュルツ『死んだ季節』

confusion

サングラズ・アサンダー、いかがでしたでしょうか。混沌とした2020年を走る内にいろいろと予定が狂いましたが、私個人に限定した話をすれば、悪いことばかりでもありませんでした（悪いことが少なかったとは言っていない）。事故ったり保険料が上がったり謎の炎症に襲われたりしましたが、日々は満ち足りています。誓って言いますがネクロテックは決して欠乏や抑うつから靈感を得ているわけではまったくありません。

さて。

本当なら13冊目のネクロテック本『シニスター・リージョン』をコミティア134にて上梓する予定だったのですが、この疫禍の中では現場に行くのも現実的ではなく。そっちは順延にしようと思った時点で、代わりの何かが必要だなとなり、ライトなやつを出すことにした訳です。なるべく時間をかけず、デザインも練らずにサクッと仕上げるということルールで作った本です。短期間で一気にやった分（一体を除き）統一感も出たんじゃないでしょうか？

もう全部できた端から収録しちゃう、ネクロテックのデモテープ集みたいなニュアンスを目指しました、何故って、今年の私は今さらPrinceにハマっていたからです。多作でありたいという気持ちが高ぶり過ぎました。知ったからにはPrinceみたいに仕事をしたいじゃないですか……。

でもたぶん来年はまた全然違う何らかの気分でやっていってると思います。それでいいのだ。

来年にはまた物理書籍で出せるはずですよ。この本に収録の娘たちは紙の方に再録するとしても1〜2体だと思うので、これを買った皆さんは損をしないと思います。でも気にするような人はこの本買ってないですね。

やり続けて8年目のネクロテックです、まだまだこの先はあります。またお会いできる日を楽しみにしています。

——メグリム・ハルヨ

■Special Thanks: FANBOX 支援者の皆様

奥付：

『サングラズ・アサンダー / SundererSASunder』

初出：2020/9/21 エアコミティア133

作者：メグリム・ハルヨ

サークル：朽techS

▽連絡先▽

haruyoi@hotmail.co.jp

twitter:megrim_haruyo



Digital Edition Only

※過去作アーカイヴス電子版はこちら <https://deadwelders.booth.pm/items/151352>

<https://deadwelders.booth.pm/items/759437>



朽techS 2020

Necrotech Digital Only EP